

私のワークライフアンバランス

羽尾 貴子

羽尾皮膚科クリニック院長

私のワークライフバランスについて執筆依頼をいただいてしまった。簡単な気持ちでお引き受けしたのだが、これまでご執筆の先生方のお名前を拝見し、すっかり萎縮してしまった。決してバランスがとれた仕事をしてきたわけではない。人に語れるほどのことはまったくやってきていないという自負があるが、子育てをしている仲間の励みになればと思い書き始めた。

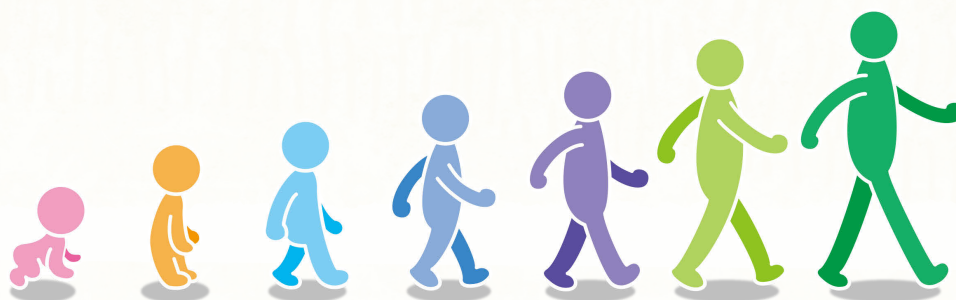
私が日本大学医学部を卒業した平成元年は研修医であっても、多くの同級生はすぐに医局に入局した。当時あまり人気のなかった皮膚科に同期入局者が12人もいたのは前代未聞であった。ちょうど森嶋隆文教授が就任された年で医局は活気にあふれていた。

実は入局説明会の前日まで小児科を希望していたのだが、将来子どもを育て、家庭とバランスをとって仕事をしたいと思い、最終的に皮膚科を選択した。皮膚科であれば子どももみられるだろうと思って、正直妥協の選択だった。

ところが、入ってみると皮膚科はとても面白かった。目にみえる皮膚からさまざまな情報を集め、病理学組織学的に診断し、そして治療ができる。とても奥が深かった。雑用も多かったが、同期でワイワイやる毎日はとても楽しかった。結婚するまでの5年間は仕事に没頭した。

しかし、結婚して子どもを授かってから仕事に対する比重は一気に低下させざるをえなかった。当時から女医が少なくなかったにもかかわらず、とくに産前産後の勤務体制についての規定がなく、同期などは大きなお腹で当直もこなしていた。幸い私は出張病院に出ており当直は逃れていたが、片道1時間の電車通勤で息子はよく臨月まで踏ん張っていてくれたと思っている。

一方で家庭内でも関白宣言さながらの夫からは「仕事をさせないわけではないが、なぜいまなのか」と責められた。産後8カ月で復職したが、「仕事の代わりはいても母親の代わりはいない」を大義名分に周囲にも迷惑をかけた。



息子の小学校入学のころから諸事情により無給医局員ではいられなくなって、以前の出張病院に戻ることができた。心機一転、せっかく得られたこの機会を存分に活かして仕事をしようと思った。

息子は放課後を学童保育、さらにファミリーサポートシステムや親戚宅を行き来して乗り切った。今日はどこに帰ればよいのかわからなくなって、病院まで泣いて電話をかけてきたことも低学年のころは1回や2回ではなかったが、その回数も徐々に減り、中学生になってからは私のほうが先に帰宅することも増えてきた。

仕事の面では寛大な部長の庇護のもとで自由に仕事ができる。大学の関連病院だったこともあり、他科に同級生が多く、気軽に相談できる環境がありがたかった。大学から来る若い先生たちにもたくさんの刺激をもらった。チーム医療が推奨される時期に重なり、褥瘡対策チームやフットケアチームに携わり、地域包括ケア病棟も担当することができた。

勤続15年目に息子の急な進路変更で定年のある勤務医でいることを断念。友人の誘いで現在の場所にクリニックを開業することになった。

必要に迫られて次のアクションをおこして、その場その場にただひたすら取り組んできたのではあるが、すべての経験が現在に活かされているのかもしれない。怖い皮膚排泄ケア(WOC)に対抗するべく励んだ褥瘡回診、フットケアを通じて知った足や爪のこと、地域包括ケアで知った在宅医療のことが、開業してからも自分のテーマになっている。また、頼りない母の背中を見て育った息子が同じ道に立った(本当の理由は知らないが)ことで、私が迷惑をかけた分を社会に還元してくれるかもしれない。

そろそろ自分の時間をつくって趣味も楽しみたいと思う。これからが私のワークライフバランスを考えるとときなのかもしれない。